

週日の説教

金 大烈 神父 2010年2月9日(火)

《意味のないこだわり》

ある金持ちが、有名な哲学者のところへ行きました。そして優れた答えが聞けるだろうと期待しながら「どのような生き方をすれば上手く生きていることになるのでしょうか」という質問をしました。すると哲学者は、「人を傷つけずに、人を助けながら生きるのが上手く生きることです」と答えました。それを聞いた金持ちは、物足りない様子で「もっと哲学的な答えを聞けると思ったのですが、それでは子どもでも分っている話ではありませんか」と言いました。すると哲学者は、「そうです。しかし私が話した事は、哲学者である私でも守りにくいことです。特に金持ちならばもっと難しくなるでしょう」と答えました。

記憶が曖昧なのですが、たぶん20年くらい前だったでしょうか、話題になった本があります。日本語でも翻訳されたと思います。日本語ではどのように訳されたか知りませんが、「われわれが習うべき全てのものは、幼稚園のときに既に習った」という内容の本です。ということは、私たちは分からなくて間違いを犯すのではなく、分かっているのにもかかわらず間違いを犯してしまう、ということになります。

さあ、今日の福音(マルコ 7:1-13)では、弟子たちが手を洗わずに食事をするのを見て、律法学者達がものすごく腹を立てていますね。そして、弟子達の先生であるイエス様に尋ねます。「なぜ先祖からの言い伝えや戒めを守らないのでしょうか。」と。それに対して、イエス様の返事はものすごく厳しいものでした。『偽善者』という言葉を使い、いろいろなことで叱ります。

『ファリサイ派』という言葉の意味を以前話したことがあります。覚えているでしょうか。『ファリサイ』という言葉は、『分離』という意味で、『ファリサイ派』というのは『分離主義者』という意味になります。では、ファリサイ派の人々はなぜ自ら『分離主義者』と名乗ったのでしょうか。彼らの先祖は初めて神様のみ言葉どおりに従った人々でした。しかし彼らは『律法』という文字に縛られてしまいました。み旨よりその文字が大事なものになってしまいました。律法はほとんどの人が守りにくいものばかりです。しかし彼らは「私たちはこれを必ず守る。だからあなた達とは違って私たちは聖別されている。あなたたちは、汚れている者たちだ。」という気持ちがあり『分離主義者』の意味である『ファリサイ派』と言う名前を自分達でつけたのです。

さあ、皆様、ファリサイ派の人々も“何が正しいか。”“何が優しいことか。”“何が悪いことか。”全部分かります。たとえば、悲しいことを見て涙を流さない人はいません。本当に感動した時に、「これは感動すべきだ」と思わない人もいません。しかし、それを自ら拒むのが、律法主義の考え方です。

皆様、今日の福音を読んでもう一回考えてみましょう。私たちは本当のみ旨から離れた何かに縛られて、こだわっていないでしょうか。執着していないでしょうか。そういうことを考えられれば、私

たちは少しでも悪いことから離れられるのではないかと思います。

皆様が腹を立てる内容や他の人が自分に対して腹を立てる内容をよく考えてみてください。殆ど小さなことです。命をかけるような内容ではありません。何の意味もないようなことなのに命を失い、全ての希望さえ失うような傷を作りながら生きています。これは私たちのおろかさではないでしょうか。たまには、寛大な心を見せる生活はできないのでしょうか。その集まりや祈りの会が正しいとはっきり分かっているのに、「その中にいる人と会いたくない」というような理由で、そういう賜物を失ってしまう場合が結構あるのではないのでしょうか。

皆様、私たちが手にとろうとしなければならぬのは宝物です。その宝物のために私たちは全てをかけましょう。他のものは全部過ぎてしまうものです。そのようなものに命をかけないでください。

ありがとうございました。